

18世紀フランス語における補語代名詞 の位置について

— pouvoir + inf. 型の場合

太 治 和 子

「動詞＋不定法」の場合、不定法の補語代名詞は、感覚動詞や使役動詞などを除き原則として不定法の直前に置かれる。しかしながら、この用法は長い間多くの議論が交されてきた問題であった。17世紀後半には今日の語順が一般的になったのであるが¹⁾、その後が続く18世紀の実状についてはこれまでまだ詳しい研究がなされていないように思われる。したがって、ここでは18世紀の文法家たちの意見を参照しながら当時散文中で書かれないくつかの作品を調査し、18世紀の状況を明らかにしたいと思う。

古フランス語の時代には、不定法の補語代名詞が主動詞の前に置かれる古い語順 (Je le peux faire 型) の方が一般的であった。この時代の語順は今日においても使役動詞や感覚動詞などに残っている²⁾。16世紀になると、徐々に近代語順、すなわち主動詞と不定法の間には補語代名詞が入る語順 (Je peux le faire 型) が現れるが、しかしながら依然多く用いられていたのは旧語順の方であった³⁾。17世紀に入ると、この問題をめぐって

1) Y. GALET, *L'évolution de l'ordre des mots dans la phrase française de 1600 à 1700*, P.U.F., 1971, p. 323.

2) G. GOUGENHEIM, *Etude sur les périphrases verbales de la langue française*, Nizet, 1971, p. 174.

L. FOULET, *Petite Syntaxe de l'ancien français*, Champion, 3^e éd., 1965, p. 144.

3) 小方厚彦「16世紀フランス語における補語代名詞の位置について」、『関西大学文学論集』, 第11巻第8号, 1962, pp. 23-29.

さまざまな文法家が意見を交すようになる。VAUGELAS は《tous deux sont bons, mais [...] si celui-là doit estre appelle le meilleur, qui est le plus en usage, *je ne le veux pas faire*, sera meilleur que *je ne veux pas le faire*, parce qu'il est incomparablement plus usité》と、述べている⁴⁾。VAUGELAS の指摘によれば、COËFFETEAU は「文体の明晰性」ゆえに近代語順の方が良いと考えていた⁵⁾。Th. CORNEILLE⁶⁾ や ANDRY⁷⁾ は、音の響き具合によって判断するべきであると考え新旧両語順を認めている。Académie も両語順を容認する立場をとっていた⁸⁾。

ところで、BRUNOT は、VAUGELAS の時代には古い語順の方が《syntaxe ordinaire》⁹⁾であったが、その後も《longtemps encore la règle de Vaugelas maintint la construction》¹⁰⁾であったと述べている。BRUNOT と BRUNEAU は、《《Je ne veux pas *le faire*》 semble être devenu, depuis le début du XVIII^e siècle, plus usuel que 《je ne *le* veux pas faire》. Les grammairiens n'ont jamais pris de décision à ce sujet》¹¹⁾と述べている。GALET¹²⁾ は17世紀の作品を綿密に調べて、近代語順の方

4) Cl. VAUGELAS, *Remarques sur la langue française*, 1647, p. 376.

5) *ibid.*, p. 377.

6) J. STREICHER, *Commentaires sur les remarques de Vaugelas*, Genève, Slatkine repr., 1970, pp. 647-648.

7) N. ANDRY DE BOIS-REGARD, *Suite des réflexions*, 1693, pp. 172-177.

8) *Observations de l'Académie française sur les Remarques de M. de Vaugelas*, Genève, Slatkine repr., 1972, t. II, pp. 142-143.

9) F. BRUNOT, *Histoire de la langue française*, t. III, 2^e partie, A. Colin, 1966, p. 679.

10) BRUNOT, *op. cit.*, t. IV, 2^e partie, A. Colin, 1966, p. 1088.

11) F. BRUNOT et Ch. BRUNEAU, *Précis de grammaire historique de la langue française*, Masson & Cie, 1949, p. 492.

12) GALET, *op. cit.*. また、コルネイユは、1660年に自分の作品の中の旧語順を近代語順に修正している。(BRUNOT, *op. cit.*, t. III, 2^e partie, p. 680)

が旧語順よりも一般的になったのは17世紀後半であったことを明らかにした¹³⁾。しかしながら、DAUZAT が指摘するように¹⁴⁾、20世紀に入ってもなお文体上の効果を狙う一部の作家たちによって旧語順が好んで使われる傾向も存在する。それでは、近代語順が一般的になった17世紀と、文体の問題として旧語順が取りあげられる20世紀の中間に存在する18世紀の言語実状とはどのようなものであったのだろうか。

18世紀の文法家たちは、近代語順を支持しながらも音調の美しさを理由に旧語順をも容認するという柔軟な立場をとる。VAUGELAS の影響を強く受けた世紀初頭の文法家 RÉGNIER-DESMARIS は、新旧両語順を全く同じように認めているが¹⁵⁾、RESTAUT になると、近代語順の方がはるかに多く用いられている事実を指摘するようになる¹⁶⁾。D'OLIVET は、ラシーヌの『バジャゼ』に関する注意書の中で次のように述べている¹⁷⁾。

Presque tous nos écrivains aujourd'hui, se font une loi de placer immédiatement ces pronoms devant l'infinif, qui les régit.

LÉVIZAC は、次のように述べている¹⁸⁾。

Dans les phrases où il y a deux verbes, on place ordinairement les pronoms auprès du verbe qui les régit, comme, *on ne peut*

- 13) 伊藤誠宏「17世紀フランス語における補語代名詞の位置について」(『関西大学文学論集』, 第20巻第2号, 1970)の中にも詳しい調査結果が載せられている。
- 14) A. DAUZAT, *Etudes de linguistique française*, Artrey, 1946, pp. 83-91.
- 15) F. RÉGNIER-DESMARIS, *Traité de la grammaire française*, Genève, Slatkine repr., 1973, p. 227.
- 16) P. RESTAUT, *Principes généraux et raisonnés de la grammaire française*, 1730, pp. 287-288.
- 17) Abbé P. J. D'OLIVET, *Remarques de grammaire sur Racine*, 1738, p. 64.
- 18) Abbé de LÉVIZAC, *L'art de parler et d'écrire correctement la langue française*, 4^e éd., 1809, p. 305.

vous *blâmer*; mais ce ne serait pas une faute de dire, *on ne vous peut pas blâmer*. Dans ce cas, c'est principalement l'oreille qu'on doit consulter.

また、FÉRAUD は、近代語順の方が望ましいと考えてその理由を次のように説明している¹⁹⁾。

Il est en éfet plus analogue au génie de la langue, qui est de rapprocher tant qu'elle peut les mots qui ont relation entre eux. [...] mais si habituellement on doit le suivre, on peut, pour la variété, ou pour la mélodie, s'en écarter quelquefois.

次に、実際の言語状況を調べるため、18世紀を前期・中期・後期に区分し、散文で書かれた小説をそれぞれ2作品ずつ²⁰⁾ 取りあげることにする²¹⁾。

19) Abbé FÉRAUD, *Dictionnaire critique de la langue française*, 1787, p. 536.

20) テキストは、次のとおりである。

P. MARIVAUX, *La Vie de Marianne*, Classiques Garnier, 1982. (調査対象は、第8章まで)

Abbé PRÉVOST, *Manon Lescaut*, Classiques Garnier, 1980.

F.-M. VOLTAIRE, *Candide*, Bibliothèque de la Pléiade, 1979.

D. DIDEROT, *Le Neveu de Rameau*, Nenden, Kraus repr., 1972.

P.-A.-F. LACLOS, *Les Liaisons dangereuses*, Bibliothèque de la Pléiade, 1979.

J.-J. ROUSSEAU, *Les Rêveries du promeneur solitaire*, Classiques Garnier, 1960.

21) 調査するに当たって、次の点を条件とした。まず、韻文は避けたこと。次に、今日でも不定法の補語代名詞が主動詞の前に置かれる使役動詞 *faire* や *laisser* や 感覚動詞 *voir*, *entendre*, *sentir*, etc., そして新旧両語順の可能な *envoyer* を主動詞の中から除いたこと。第3に、補語代名詞の範囲は不定法の補語に限定し、*falloir+inf.* の動作主補語は省いたこと (*il me faut+inf.*, *il lui faut+inf.* の *me* や *lui*)。第4に、*se faire+inf.* (受身を意味する構文) や *ne faire que+inf.*, そして *il se peut faire que* 等の成句的表現は、対象外とした。これらの条件は、今日の用法と18世紀の用法との相違点をより明確にするためである。

なお、補語代名詞としては人称代名詞とともに *en*, *y* も対象とし、不定法については前置詞のないもの *infinitif pur* のみを取り上げた。

まず、18世紀前期の作品、マリヴォーの『マリアンヌの生涯』（1731～37年）の中には、近代語順が777例、旧語順が78例見られた。全体の9%に旧語順が残っていることになる²²⁾。その場合の主動詞の種類は、venir 33例（近代語順68例）、pouvoir 18例（218例）、aller 12例（106例）、devoir 7例（70例）、vouloir 4例（99例）、falloir 3例（49例）、savoir 1例（39例）である。例えば、

les connaisseurs n'y pouvait tenir de plaisir (p. 8)

[religieux] qui me vient voir (p. 19)

j'y veux mettre ordre (p. 34)

la femme me serait venue prendre (p. 142)

ce que j'en puis expliquer (p. 214)

cela qu'il me voulait dire (p. 369)

l'estime que j'en dois faire (p. 422)

次に、旧語順に置かれた場合の主動詞と不定法の補語代名詞の頻度を表にまとめてみる。○の中の数値は近代語順の用例数を示している。

<表1>

	me	te	le, la	lui	nous	vous	les	leur	en	y	se
venir (revenir)	18(33)	2 (1)	7 (7)	0 (5)	5 (2)	1(14)	—	—	0 (2)	3 (2)	0 (8)
pouvoir	0(59)	0 (2)	1(37)	0(13)	1 (5)	0(44)	—	—	13(29)	4(13)	0(39)
aller	4(23)	1 (2)	5(21)	0 (9)	0 (5)	1(30)	1 (1)	0 (2)	0 (5)	0 (4)	0(10)
devoir	0(18)	—	1(16)	1 (7)	—	0(14)	0 (1)	—	4 (6)	1 (4)	0 (5)
vouloir	2(38)	—	1(22)	0 (8)	0 (1)	0(18)	—	—	0 (8)	1 (2)	0 (9)
falloir	0 (7)	0 (1)	1(10)	0 (5)	—	0 (6)	0 (1)	—	3 (5)	0 (6)	0(11)
savoir	0 (7)	0 (2)	0 (9)	0 (2)	0 (1)	0 (9)	—	—	0 (5)	1 (6)	0 (4)

22) GOUGENHEIM (*op. cit.*, p. 175) によると、
Conférence, éd. Rosset, 71%, (1651年)
 MOLIÈRE, *L'Avare*, 38%, (1668年)
 DANCOURT, *Les Bourgeoises à la mode*, 17%, (1700年)
 LE SAGE, *Turcaret*, 12%, (1709年)
 以上のような割合で旧語順が残っていた。

旧語順の見られる文例の多くの主動詞は、「場所の移動を表わす動詞」である *venir* (*revenir*) や *aller*, それから *pouvoir* であることがわかる。なかでも *venir* は全体の3分の1が旧語順に置かれている。特に, *venir voir* (旧語順15, 新語順8) や *venir prendre* (旧語順9, 新語順5) といった言い回しにおいて旧語順がきわめて多く見られる。これらはいずれも「会いに来る」「迎えに来る」といった意味を表わし, 分割しがたいひとつの固定された表現となり, 不定法が補語代名詞をとる時も2語の間に入るのではなくその前に置かれる傾向があったのではないだろうか。次に, 主動詞が *pouvoir* の場合であるが, <表1>から, *en*, *y* と共に用いられて旧語順が多く現れることがわかる。*devoir* についても同様である。

したがって, マリヴォーのこの作品の中では, 旧語順をとる場合として次の2つが挙げられるであろう。ひとつは, 「場所の移動を表す動詞」が主動詞の場合, そしてもうひとつは, *pouvoir* や *devoir* が *en*, *y* と共に用いられた場合であった。

また, 主動詞 *falloir* に関しては, 間接目的格の形である *me*, *te*, *lui*, *nous*, *vous*, *leur* は, 動作主補語と混同される恐れがあるので決して主動詞の前に置かれることはなかった²³⁾。これは, 後で取り上げる他の作品全てにも共通する点であった。

最後に, 本論は *infinitif pur* を対象とするものであるが, *venir de + inf.* の構文において, 不定法の補語代名詞が前置詞 *de* をとびこえて主動詞 *venir* の前に置かれたものが2例見られたのでここで紹介しておきたい。

tout ce qu'on m'en vient de conter (p. 156)

elle est si malheureuse que nous en venons de pleurer (p. 156)

これらはいずれも同じ登場人物(修道院尼僧)によって述べられたものである。この作品の中には, *venir de* の例は41例ありそのうちこの2例だ

23) *Il lui faut dire la vérité. / Il faut lui dire la vérité.* の意味の区別は, 唯一 *lui* の文中での位置による。

けが旧語順をとっていることから、登場人物の個人的な文体特徴にその原因を求めるべきかもしれない。17世紀、コルネイユの作品の中などに *venir de* の旧語順例は若干残っていたが²⁴⁾、18世紀に入ると、前置詞を伴う不定法の補語代名詞はその不定法の直前に置かれるのがすでに規則的になっていた²⁵⁾。したがって、このマリヴォーの例はきわめて特殊な例外であろう。ここで調査対象とした作品のうち最後のルソーの中だけに同様の旧語順例が見られたが、他の4作品はすべて近代語順を規則的にとっていた。

次に、18世紀前期のもうひとつの作品として、プレヴォーの『マノン・レスコー』(1731)を取り上げる。323例のうち、近代語順は291例、旧語順は32例、全体の10%に旧語順が残っている。旧語順に置かれた場合の主動詞と補語代名詞の種類をまとめると次のようになる。()の中は近代語順の用例数を示している。

<表2>²⁶⁾

	me	te	le, la	lui	nous	vous	les	leur	en	y	se
pouvoir 11例 (122)	1(50)	1(1)	3(14)	1(8)	0(3)	0(19)	0(6)	—	3(5)	2(5)	0(18)
venir 6例 (37)	1(24)	—	3(1)	0(5)	1(3)	0(3)	—	—	0(3)	1(0)	0(1)
vouloir 6例 (31)	2(8)	0(1)	2(7)	0(5)	0(1)	0(5)	0(1)	—	1(1)	1(1)	0(4)
devoir 4例 (22)	0(5)	—	1(3)	1(2)	0(5)	—	—	—	1(0)	1(4)	0(3)
aller 3例 (25)	2(9)	—	1(3)	0(3)	0(1)	0(3)	1(2)	0(1)	0(1)	—	0(2)
falloir 1例 (16)	0(2)	—	0(5)	0(1)	0(4)	0(1)	—	—	0(2)	1(0)	0(1)
penser 1例 (0)	—	—	—	—	—	—	—	—	1(0)	—	—

ここでも、主動詞 *pouvoir* の例が多いが、近代語順の用例数と比較してみると、その中でも特に *en*, *y* と共に用いられた場合に旧語順が多い。補語代名詞が *en*, *y* の場合には、主動詞が *pouvoir* の時だけでなく他の

24) *Horace*, 1536. (GALET, *op. cit.*, p. 23) *Polyeucte*, 1014. (*ibid.*, p. 326)

25) GOUGENHEIM, *op. cit.*, p. 182.

26) 表の中で、一文中に二つ以上の補語代名詞を取る場合は、それぞれに重複記載してあるので、この場合の合計数は一致しない。

動詞の場合でも旧語順をとる確率がきわめて高い（表の中の en, y の全用例数28例のうち旧語順は12例、すなわち43%が旧語順である）。『マリアンヌの生涯』と異なるのは、主動詞 *vouloir* が多かったことと、*penser* の例が1例見られたことである。

j'en pensai perdre la raison (p. 53)

penser + inf. の例はこの1例しかなく、したがって近代語順は見られなかった。さらに、この作品の中には次のようなきわめて珍しい例も見られたのでここで紹介する。

si vous me voulez prendre à votre service ou me donner une honnête récompense (p. 104)

これは、作中人物である牢番が発した言葉である。主動詞 *vouloir* が2つの不定法を従えていて、最初の *prendre* にかかる補語代名詞 *me* は旧語順に置かれ、次の *donner* にかかる *me* は近代語順に置かれて繰り返されている。

次に、18世紀中期の作品として、ヴォルテールの『カンディード』(1751年)とディドロの『ラモーの甥』(1762年)を取り上げることにする。初期に比べて中期に入るとまず主動詞の種類が減少する。旧語順の残存率は、ヴォルテールで11% (118例中13例)、ディドロで10% (89例中9例)で、初期の2作品と比べても大きな変化はない。ところが、ヴォルテールの<表3>、ディドロの<表4>を見ると、

<表3>

	me	te	le, la	lui	nous	vous	les	leur	en	y	se
<i>pouvoir</i> 7例 (40)	0 (5)	—	0 (5)	0 (5)	1 (2)	0 (6)	—	0 (1)	5 (8)	0 (2)	1 (9)
<i>vouloir</i> 3例 (11)	0 (2)	—	1 (2)	0 (2)	0 (2)	—	—	—	2 (0)	—	0 (3)
<i>aller</i> 2例 (17)	0 (3)	0 (1)	0 (6)	—	1 (0)	0 (1)	—	0 (1)	0 (1)	0 (2)	1 (5)
<i>falloir</i> 1例 (10)	—	—	0 (3)	—	—	0 (3)	—	—	1 (0)	0 (3)	0 (2)

〈表4〉

	me	te	le, la	lui	nous	vous	les	leur	en	y	se
pouvoir 4例 (14)	0 (3)	—	1 (1)	—	0 (1)	0 (2)	—	—	3 (0)	0 (1)	0 (7)
vouloir 2例 (3)	—	—	—	0 (1)	—	0 (2)	—	—	2 (0)	—	—
aller 1例 (12)	0 (2)	—	0 (2)	0 (1)	0 (1)	0 (4)	0 (1)	—	1 (0)	—	0 (2)
venir 1例 (3)	1 (0)	—	—	—	0 (2)	—	—	—	—	—	0 (1)
devoir 1例 (4)	—	—	—	0 (1)	—	—	—	—	1 (0)	—	0 (3)

ヴォルテールの『カンディード』では、主動詞の種類は4種類、ディドロの『ラモーの甥』では5種類しかなく、両作品とも、pouvoir, vouloir の用例が多く、補語代名詞は en に集中している。例えば、『カンディード』の中には、

Comment *en* pouvez-vous douter (p. 188)

Candide n'*en* voulut rien faire (p. 201)

『ラモーの甥』の中には、

tout ce qu'on *en* peut apprendre (p. 8)

[...] n'est pas la que vous *en* voulez venir (p. 44)²⁷⁾

je n'*en* veux plus entendre parler (p. 103)

son art n'*en* peut imiter (p. 166)

などの例が見られる。特に、『ラモーの甥』については、補語代名詞 en の場合表の主動詞全てに対して旧語順をとっており、近代語順の例は1例も見られない。ディドロは、とりわけ好んで en+動詞+inf. の表現を使用したものと思われる。

j'*en* devois etre (p. 21)

comme vous *en* allez juger (p. 166)

一方、『カンディード』の中には、不定法が代名動詞でその se が主動詞の前に置かれた例が2例あったが、このような例はルソーを除く他の作品の中には見られなかった。

27) 綴りは原文のまま。他の例文も同じ。

Il s'avisait [...] de s'aller promener (p. 148)

このように、中期の2作品においては、旧語順の残存率そのものにはまだ変化はなかったものの、旧語順の現れる表現がかなり限定されるようになり、その多くが en pouvoir+inf. や en vouloir+inf. の場合であった。

18世紀後期になると、ここで調査対象とした2作品の間で全く逆の変化が起こることになる。ラクロの『危険な関係』(1782年)では、1042例中旧語順はわずか33例しかなく、その割合は3%に減少している。一方、ルソーの『孤独な散歩者の夢想』(1782年)では、215例中51例までが旧語順であり、旧語順は全体の24%を占めている。〈表5〉はラクロの作品、〈表6〉はルソーの作品の中での旧語順の主動詞、補語代名詞を分類したものである。

〈表5〉

	me	te	le, la	lui	nous	vous	les	leur	en	y	se
pouvoir 14例 (367)	0(92)	0(3)	1(62)	0(16)	0(13)	0(87)	0(17)	0(2)	9(50)	4(24)	0(42)
aller 9例 (70)	4(22)	1(1)	4(10)	0(4)	0(1)	0(19)	0(2)	—	0(4)	0(4)	0(9)
devoir 4例 (94)	0(26)	0(1)	1(19)	0(5)	0(3)	0(23)	0(1)	0(2)	3(12)	0(5)	0(5)
vouloir 3例 (159)	0(52)	0(4)	0(35)	0(7)	0(2)	0(31)	0(6)	—	3(22)	0(7)	0(12)
oser 1例 (35)	0(11)	—	1(10)	0(4)	0(1)	0(7)	—	—	0(4)	—	0(2)
être 1例 (1)	—	—	1(0)	—	—	—	—	—	0(1)	—	—
venir 1例 (27 (4))	0 (15(2))	0 (1)	0(3)	0(1)	0(2)	0(2)	0(2)	—	0(2)	1(0)	0 (1)

[] 内は、revenir に関する例の数

まず、ラクロの作品の中で旧語順を多くとっているのは、pouvoir, vouloir, devoir と en や y が結びついた場合、そして「場所の移動を表す動詞」(特に aller) が主動詞の場合であり、これは18世紀前期中期にも共通して見られた特徴であった。

pour t'aller retrouver (p. 345)

また、aller の意味で用いられた être が1例、oser が1例、それぞれ旧語順に置かれていた。

je ne l'ai pas été chercher (p. 80)

si je l'ose dire (p. 74)

<表6>

	me	te	le, la	lui	nous	vous	les	leur	en	y	se
pouvoir 23例 (72)	4(34)	—	2 (9)	0 (2)	0 (2)	—	1 (0)	2 (1)	6 (1)	9 (6)	2(22)
aller 6例 (7)	4 (4)	—	1 (0)	0 (1)	—	—	0 (1)	—	—	—	1 (1)
savoir 5例 (11)	0 (3)	—	0 (1)	1 (0)	—	—	1 (2)	—	2 (1)	1 (1)	0 (4)
falloir 5例 (13)	0 (1)	—	0 (1)	0 (1)	—	—	1 (6)	—	1 (0)	3 (1)	0 (4)
devoir 5例 (10)	1 (5)	—	0 (3)	0 (1)	—	—	1 (0)	0 (1)	2 (0)	3 (1)	0 (1)
venir 4例 (7)	2 (4)	—	—	—	0 (1)	—	—	—	1 (1)	1 (0)	0 (2)
croire 1例 (4)	0 (3)	—	0 (1)	—	—	—	—	—	—	1 (0)	—
vouloir 1例 (16)	0 (7)	—	0 (4)	—	—	—	1 (1)	—	0 (2)	—	0 (4)
oser 1例 (1)	—	—	1 (1)	—	—	—	—	—	—	—	—

これに対しルソーの作品の中では、主動詞の種類も補語代名詞の種類も多彩であって、ばらつきに富んだものになっている。en, y については、<表6>の中では旧語順例の方が多いが（旧語順30例、近代語順12例）、しかしながら en, y に旧語順が特に集中しているというわけではない。また、ルソーの場合、旧語順の用例数が多いだけでなく、その用例自体にも特異なものはいくつか見られる。

例えば、

je m'allais promener (p. 80)

この《m'allier promener》は、作品の中で3回現れ全てが旧語順に置かれており、ルソーが好んで用いた言い回しのひとつだと思われる。次の例においては、

De quelque façon que je m'y sois pu prendre (p. 114)

主動詞は pouvoir であるが、旧語順に置かれたために後の代名動詞の補語が前置され、そのために助動詞は être をとっている²⁸⁾。

28) ヴォルテールの『カンディード』の中にも不定法が代名動詞の場合の旧語順例があったが、主動詞は決して複合時制に置かれることはなく、したがって、助動詞が問題となることもなかった。

この場合の助動詞は avoir か être か。これは実は17世紀に議論された問題であった。17世紀の文法家 SAINT MAURICE は《s' être pu faire》型を規則として確立し、ANDRY や FURETIÈRE もこれに賛成する立場をとっていた²⁹⁾。しかしながら、この場合過去分詞 pu は性数一致をとるのかどうかというまた別の問題もあった。そこで、実際には17世紀においても、この場合には旧語順ではなく近代語順を用いる方が一般的であった³⁰⁾。さらに18世紀に入ってからは、文法家たちでさえもこの場合の旧語順は誤りであって近代語順を用いるべきであると考えられるようになる (DE WAILLY, LÉVIZAC, FÉRAUD)³¹⁾。したがって、18世紀後半のルソーの作品の中に旧語順の例が見られる事実は大変注目に値する。なお、現代フランス語においても、この形の旧語順は非常に稀ではあるが時折存在し、その場合の助動詞は être をとることが *Le Bon Usage* の中に記されており、シャトーブリアン等からの例が載せられている³²⁾。

また、venir de+inf. の旧語順例がルソーの作品の中に見られたのでここで紹介しておく。

j'en (=de ma carrière) venais de passer la plus belle moitié
(p. 30)

このように、ルソーの作品は時代を大きく逆行するものであり、他の5作品とは大変異ったものであった。ルソーの生まれがジュネーヴであったという点を考慮しなければならないのかもしれない。あるいはまた、19世紀の作家シャトーブリアンは旧語順を好んで用いた作家であるが³³⁾、ルソーの場合にも懐古調文体を意識し旧語順を好む傾向があったのかもしれない

29) GOUGENHEIM, *op. cit.*, pp. 184-185.

30) *ibid.*

31) *ibid.*

32) M. GREVISSE, *Le Bon Usage*, Duculot, 12^e éd., 1988, p. 1050.

33) シャトーブリアンの『墓の彼方からの回想』の旧語順の割合は、第1部が45%、第2部が62%、第3部が45%、第4部が52%である。(GALET, *op. cit.*, pp. 422-425 による。)

ない³⁴⁾。

以上、非常に限られた調査対象ではあったが、これまでの結果をまとめてみると次のようになる。

18世紀初期において10%前後残っていた旧語順は、中期になると割合そのものにはまだ変化は見られないものの旧語順をとる場合がかなり限られたものになる。すなわち、《en, y+pouvoir, vouloir, devoir+inf.》の表現で用いられる場合と、主動詞が aller, venir の場合である。後期になると、ラクロの作品では近代語順がほぼ規則的になったが、ルソーの作品では逆に旧語順が大きく増加し実際の用例も変化に富むものが見られた。

ところで、今日のフランス語においても、この語順の問題についてはいくつかの指摘がなされている。GREVISSE は、アルカイックな構文として、主動詞が pouvoir, aller, vouloir, devoir, falloir, venir, savoir, oser, croire, penser の場合旧語順が見られることを述べているし³⁵⁾、*Le Bon Usage* の中では、旧語順は今でも文学作品の中や南仏、ロレーヌ、ノルマンディー地方などに残っており、その場合 en, y を用いた用例が特に多いことを指摘している³⁶⁾。LE BIDOIS も、現在見られる旧語順例のほとんどが、en, y を用いたいくつかの固定表現であることを述べている³⁷⁾。したがって、現在のこのような状況は、18世紀を通して形成されたことに最後に注目しておきたいと思う。

(本学非常勤講師)

34) ルソーの別の作品『新エロイズ』では、1707例中、旧語順は327例あり、全体の19%を占めていた。(J.-J. ROUSSEAU, *Julie ou la Nouvelle Héloïse*, Classiques Garnier, 1960)

35) M. GREVISSE, *Le Français correct*, Duculot, 4^e éd., 1989, p. 210.

36) GREVISSE, *op. cit.*, pp. 1047-1051.

37) G. et R. LE BIDOIS, *Syntaxe du français moderne*, Picard, 2^e éd., 1967, pp. 157-158.